

## キャンパス便り



**氏名：**小林 琴音 (こばやし ことね)

**専攻コース名：**MA Development Studies 2022-2023

こんにちは。2022-2023年度にIDSに在籍した小林琴音です。今回は私の「キャンパスライフ」について紹介します。

### 留学の背景

フィリピンで子ども時代を過ごしたため、幼い頃から国際開発・国際協力に興味を持っていました。開発分野における民間セクターの重要性から、まずはビジネスの仕組みを勉強したいと思って学部卒業後は民間企業に勤めました。一区切り着いた頃に大学院進学を決めましたが、開発学の最高峰である研究機関であり、ネットワークづくりにも最適な場所という理由からIDSを選びました。

### 学業について

久しぶりに学生に戻ったため、はじめは学術文献を読むことや最後まで授業に集中することに慣れるのに苦労しました。その中でも特にセミナーでのディスカッションに参加することは大変でした。開発分野での職務経験がない自分は他学生と比べて話せることが少ないと当初思っていたのですが、教授に相談したら「全く違う経験をしているからこそあなたの意見が大事」と言ってくださり、その後からは素直に自分の思うことを話して参加することができました。また、「ビジネス×開発」を軸にして科目を履修していましたが、私のコース必修の「Ideas in Development」の授業では人類学、ジェンダー、パワー等、今まであまり触れることがなかった学問についても学ぶ機会があり、知識を広げることができたと同時に、自分が思う「開発学」や「国際協力」を定義するための良いヒントを得たと思います（まだ結論に至ってないですが）。

春学期に入ると履修科目が増え、修士論文のプレッシャーも少しずつ大きくなってIDSで過ごす時間が増えましたが、大体いつも同じメンバーがsilent studyスペースで集まるようになり、とてもアットホームな空間が出来上がりました。5月に立て続けの論文提出に追われながら夜遅くに建物から追い出されるまで一緒に勉強したことは今となって良い思い出です。

### ブライトンの暮らしについて

オン・キャンパス寮に住んでいたため、自然豊かなファルマーでのんびりしていました。それまでは基本的に都会暮らしだったので、朝起きた気分次第でスタンマーの中をちょっと散策したり、海岸までランニングしたりして常に自然と隣り合わせだったことは新鮮でした。また、サッカー観戦で三笥選手の活躍もちゃんと見ることができて良かったです。

IDSに来る学生は自分の想定以上に多種多様なバックグラウンドを持っており、この1年間は開発学だけでなく、「ダイバーシティ」についても多く学んだ印象です。時には衝突することもありましたが、違いを分かち合いながら仲良くなった友達は大学院生活の大きな財産です。将来それぞれがどのような道に進むのか楽しみます。

### 今後について

目標にしていた国際開発・国際協力でのキャリアをスタートするべく、11月からJICAに就職します。民間企業時代の経験とIDSで学んだ開発学の理論をこれから「応用」する立場として、まずは新しい仕事や職場に慣れて即戦力になれるよう頑張りたいと思います。また、色んな仕事、プロジェクト、経験等を通して、自分が思う「開発学」や「国際協力」を深掘りし続けて、国際社会に貢献したいです。



毎日のように一緒に勉強し、食事し、締め切り直前までお互いを励ましあったメンバー。

## ALUMNI NOW!

**氏名:** 中村 唯 (なかむら ゆい)  
**専攻コース名:** MA in Poverty and Development (2007-8)  
**現所属:** 公益財団法人 笹川平和財団

こんにちは、中村唯と申します。サセックス大学では、Institute of Development Studies (IDS)に在籍し、Poverty and Development を専攻していました。修了してから、早くも15年になります。

### サセックス大学 (IDS) への留学にいたるまで

留学を決意した当時、私は既に30代半ばで、国際協力関連の仕事をしていました。学業では、大学を卒業してすぐにタイのカセサート大学に留学し、社会開発学の修士号を取得していました。国際機関や研究職を目指す周囲の人々が、そのまま欧米の有名校に進学するのを見て、私もその道を目指すべきかと迷ったのですが、「唯はタイのことを学びにきたのに、タイの実社会に出ないまま、欧米に行くのか？進学ならいつでもできる。まずは、社会に出て苦労すべきだ。そうでなければダメな人間になるよ」とタイの友人に進言されたのです。まさに目が覚めるような一言でした。その後、地元新聞社に就職したものの、間もなくアジア通貨危機の煽りを受けてレイオフになるなど、辛い経験もしました。ただ、タイで過ごした10年間は私の人生の中で一番大切な宝物で、その友人には心から感謝しています。

前置きが長くなりましたが、その後、バンコクの国際交流基金で経験を積み、帰国し、シンクタンク勤務を得て、転職先の民間財団でインドの貧困層を支援する助成プログラムの立ち上げを任されました。タイは歴史的にインド文化圏の一部とはいえ、巨大なインドは私にとって未知の国。また、2000年代半ばは、今のデジタル大国のインドとは程遠く、インフラも整っておらず、農村地域を転々と数か月かけてまわるのは体力的にも精神的にもなかなか骨が折れる体験でした。しかし、当初はマイクロファイナンスやHuman Rights-Based Approachの全盛期。草の根のNGOや当事者の人々によるインドの社会運動の勢いや、想像を絶する苦難にも負けずに闘う崇高な精神にただただ圧倒され、私自身、この業界にいる者として、もう一度、基本を学びなおしたいと思ったのです。インドの友人たちは、ならばIDSに行くべきだと強く勧めてくれました。働きながら、British CouncilのAcademic Writingの夜間クラス等に通い、なんとか入学許可を得ることが出来ました。

### 留学時代の日々

このようにミッドキャリアでの留学でしたので、授業では、新しいことを学ぶというより、追体験し、そ

れを再確認するような毎日でした。ただ、各局面で、講師の皆さんが、自らが対象との関係性において、どのようなポジショニングを取っているのか明らかにしてから議論を進める姿勢はとても新鮮で、非常に感銘を受けました。今でこそ、日本でも多様性が尊重されるようになってきましたが、構造的に相手との力学を捉え、自らの立場と限界を認識した上でコミュニケーションを取る。そして、そのやり方は果たして相手にとって正しかったのか、相手の立場に立って批判的に自らを検証し、それを踏まえた上で改善していく。特に、内省をテーマにした「Reflective Practice」という授業は非常に刺激的でした。

また、当時は、FacebookやSkypeはあったものの、まだ、スマートフォンがなかった時代です。課題に追われる中、友人たちの家を訪ね合い、パーティをしたり、海沿いでアイスクリームをほうばったりしたのは良い思い出です。私はKings Roadの寮に住んでいたのですが、夜はパブ帰りの人たちのあまりの騒ぎで毎晩、耳栓をして寝ていました！でも、窓から見えるピアと海の景色は、今でも昨日のこのように蘇ってきます。生涯の友と呼べる大切な人たちにも出会うことが出来ました。去年から今年にかけて何人か東京を訪ねてきてくれたのですが、本当に嬉しかったです。

### 現在の仕事

IDSを修了後、JICAを経て、2015年から笹川平和財団に勤務しています。過去8年間、インドに関わる事業を担当してきました。インド国内でも周縁化されてきたインド北東部8州を重点的に取り上げ、視聴覚アーカイブや出版、平和資料館の整備など、特に女性やマイノリティの人々が自らの手で、自らの記憶を記録し、次世代に継承していく取り組みを進めてきました。その成果の一つとして、今年6月、インド北東部の女性作家のアンソロジーの邦訳『そして私たちの物語は世界の物語の一部となる』が、国書刊行会から出版されました。宜しければ、ぜひお手に取って頂ければ幸いです！





## Reflections on the University of Sussex Motto, “Be Still and Know”

**Jenny Yamamoto**, BA (Hons) Economics in the School of African and Asian Studies, 1989-91; MA International Economics, 1991-92

When I was a student at Sussex in the early 1990s, my friends and I used to laugh about the university motto, “Be still and know.” We imagined ourselves sitting in lectures with our eyes closed, letting knowledge seep through our skin. It seemed an appropriate motto for our student life, especially in the early summer when we relaxed on the campus grounds, reading, chatting with friends, or just enjoying the sun.

Years later, I learned that the motto was a quote from Psalm 46 of the Christian Bible. This psalm is thought to have been written at a time of great strife, although it is not known whether it was during a war or a time when something difficult was happening in the author’s life. The psalm begins with “God is our refuge and strength, an ever-present help in trouble,” and then describes how God has the power to end all conflicts. Then God calls on believers to stop struggling (“Be still...”) and trust that He will take care of them (“...and know that I am God; I will be exalted among the nations, I will be exalted in the earth”). In other words, it calls on believers to live in awe of God and to put their trust in God’s protection.

Although I don’t believe in any god or gods, I can appreciate the university motto much better now that I am older. In particular, I have come to appreciate the power of believing in something bigger than oneself.

A few years after graduating from Sussex, I joined the United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (ESCAP) in Bangkok, Thailand. It was a total culture shock, especially coming from a university which had trained us to think critically about everything. Even though the UN Conference on Environment and Development had taken place in Rio a few years earlier, the language used in official documents and meetings was stuck in the 1980s, when economic growth was still the mantra of development.

But this status quo was partly due to our member governments. For example, one of the first intergovernmental meetings I attended centred around the name of the legislative committee which my division worked for. At the time it was called the “Committee on Environment and Natural Resources Management,” and some high-income countries wanted to rename it the “Committee on Environment and *Sustainable Development*.” However, this was staunchly opposed by most middle- and low-income country governments. After many hours of discussion, the countries agreed to change the name to the “Committee on Environment and *Natural Resources Development*.”

That so much valuable meeting time had been spent arguing about the name of the committee, rather

than discussing more substantive issues, was almost too much for me to bear. However, I decided to suspend my criticism and try to understand the thinking behind the position taken by governments. Eventually, I understood that they had opposed the term “sustainable” because they interpreted it (quite correctly) as having to respect the environment, and they thought it would restrict their development activities or make them more costly.

Although I disagreed with their position, this experience made me realize that the governments took the work of the committee pretty seriously. From that time on, I tried to look beyond my own perspective and appreciate the bigger picture. (Incidentally, some years later the committee did change its name to the “Committee on Sustainable Development”).

More recently, I was reminded again of the Sussex motto during my doctoral studies. After working at ESCAP for over 12 years, I decided to go back to university, this time in Japan. I joined the Graduate School of International Development and Cooperation (IDEC) at Hiroshima University in 2014, and initially planned to research rural transport issues in Nepal. However, after visiting rural Shimane (and running out of research funds), I decided to focus on the mobility challenges facing elderly people living in the *chusankan chiiki* of Hiroshima and Shimane prefectures.

If you live in Japan, you constantly hear news about depopulation trends in rural areas and the impact on people living there. I can attest to these trends: in the seven years I have been going to my research field site, I have witnessed the closure of the local gasoline station, sewing factory, junior high school, barber shop, and two grocery shops. Even the god in one of the mountain shrines had to be moved to another shrine because there was no one to maintain the path to the shrine. The “closing down” of this rural district made me increasingly nervous. “What will happen when there are no shops left?” I thought. “What will happen when the bus services are stopped?”

But despite these trends, the local people do not seem to share my anxiety. It is not that they willingly accept what is happening, but their focus is on living today in safety and good health, while maintaining those traditions they can still manage. Perhaps their attitude is also a reflection of Buddha’s teaching「過去を悔まず、未来を憂えず、今に最善を尽くせば幸運を招く」(Don't regret the past, don't worry about the future, do the best you can in the present and you will have good fortune). There are, of course, some people who are adversely affected by the changes taking place, but they draw on the support of their families, neighbours and the local community centre staff.

So what appears, to outsiders, to be a passive resignation about the future, may in fact reflect the residents’ collective faith in themselves and their society. In other words, most people in rural areas seem to be practising “being still” and believing in something bigger than themselves. This is perhaps something we all need to be reminded of from time to time.

# お知らせ

## 「シニア(先輩)とジュニア(後輩)を結ぶ世代間交流の促進」活動のご紹介

藤村建夫

今年度から、新しい同窓会の活動として、表記の活動が開始されましたので、ご紹介いたします。ここでいう「シニア」と「ジュニア」の意味は、「先輩」と「後輩」といった意味で使用しており、一般的に意味するところの年齢の高い、低いという意味ではありませんので、ご留意ください。

### 目的

「シニアとジュニアを結ぶ世代間交流の促進」活動は、自らのキャリア開発を目指すジュニア世代が、シニア世代が持つ専門的に豊富な知識・経験を共有できるための機会を提供しようとするものです。

### 同窓会の財産を共有するメカニズムを創る

サセックス大学同窓会日本支部は、1991年11月に設立され、32年の歴史を持っています。1970年代にサセックス大学に留学する日本人は、年に数名から10数名でしたが、現在では、毎年、40～50名の学生・研究生が留学するようになり、大学には常時150～200名の学生・研究生が在籍するようになりました。この間に、日本人留学生の総数は優に1000人を超えていると推定され、同窓会は、会員の年齢構成が20代から70代までの広範な世代が所属する団体になりました。

シニアの会員は、国内外の多様な分野の組織で働いた経験に基づく貴重な知見とノウハウを持っており、これは同窓会の貴重な財産です。このような知見とノウハウは、人生を模索しているジュニア会員にとっては、大いに有益な情報でもあります。残念ながら、シニアとジュニア世代間には、お互いを知りあう機会が限られていたため、この財産を共有できていないのが実情です。そこで、本活動は、この貴重な同窓会の財産が世代間で円滑に共有されるためのメカニズムを創造し、機会を提供することを意図しています。

### 世代間交流の応募方法

シニア(先輩)/ジュニア(後輩)世代間交流を希望する人は、簡単な略歴書を添付して、相談したい事柄を明記して、下記の宛先(担当幹事：藤村建夫、甲斐田万智子)に送付してください。

[tfuji3181@hotmail.com](mailto:tfuji3181@hotmail.com) ; cc: [kaida@c-rights.org](mailto:kaida@c-rights.org)

申込を受け取ってから、適切と思われるシニア(先輩)世代の会員をご紹介しますので、交流が実現しましたら、簡単な結果を事務局宛てに報告してください。経費は無料です。

### 活動のねらい

本活動は、サセックス大学同窓会日本支部会員が持つ特色を活かした、ユニークな活動です。

- 同窓会会員の約70%超が国際開発分野の修士課程を学習しています。
- 国際開発分野の卒業生のシニア世代の多くが国際機関、日本の国際協力関係の政府関係機関、NGO/NPO、開発コンサルタント企業、大学・研究機関等に勤務した経験を持っています
- 国際機関や日本の国際協力関係機関で働くためには、競争試験や競争的なリクルートメントの課程をクリアしなければなりません。ジュニア世代の会員は、このような競争試験にチャレンジするためのノウハウや勤務してからの競争に勝ち抜いていくためのノウハウを必要としています。
- 他方、シニア世代の会員の中には、国際機関を含む国際開発協力関係機関・団体等で働いた豊富な経験に基づく知見とノウハウをもっている人が多数存在します。そこで、本活動は、このジュニア世代のニーズに応えられるシニア世代会員を募り、両者の交流を実現してより多くのジュニア世代が国際開発分野のプロフェッショナルとして活躍できるように支援することをネライとしています。

### 国際開発分野でシニア世代が活躍する組織・団体

国連と国連関係機関	国際協力機構 (JICA)
世界銀行グループ	NPO/NGO、財団法人
アジア開発銀行	開発コンサルタント企業
国際NGO	大学・研究所

すでに数件の問い合わせをいただいています。先輩とのネットワークをもっていない後輩の皆さまからのご相談をお待ちしていますので、遠慮せずにどしどしお問い合わせください。ニューズレターで紹介された先輩へのコンタクト希望もお知らせください。



**編集後記:** 今回のニューズレターは2名で編集を担当しました。IDS17年卒業の齊藤吉洋（現在世界銀行ネパール事務所）とCIEに2002年から08年に在籍した塩畑真里子（グリーンピース勤務）です。原稿を執筆くださった皆様、大変ありがとうございました。日本はこの夏記録的高温に見舞われ秋になっても異常な暑さが続いています。気候危機の深刻化を受けて、地球市民の誰もが自分の生活スタイルを見直す必要を感じて欲しいものです。